

ハイマート Heimat

ぐんま日独協会 会報

2016年9月6日

48号

発行者 鈴木 克彬

発行所 ぐんま日独協会

〒371-0105

群馬県前橋市富士見町石井 2445-219

電話 : 027-288-4297

E-mail : info@jdg-gunma.jp

ホームページ : <http://www.jdg-gunma.jp/>

ホームページ右下『ハイマート』から本誌をカラーでご覧いただけます。



*** 【 ドイツ人交換留学生と高崎経済大学学生たちとの交流会 】 ***

- | | | |
|-----------------------------|-------|---------|
| 1. ハイマート 48 号に寄せて (会長のことば) | | 2 |
| 2. 講演会「難民問題とドイツの対応」要旨 | | 3 |
| 3. 独俳 (ドイツ語で俳句) (連載 - 3) | | 4 ~ 6 |
| 4. ドイツ人交換留学生と日本人学生との交流会 | | 7 ~ 8 |
| 5. 講演会「温泉と健康」要旨 | | 9 |
| 6. デザイナー修行奮闘記 (連載 - 8) | | 10 ~ 11 |
| 7. 総会と内部講演会 (前橋市の LRT 導入関連) | | 12 |

1. 会長挨拶

ドイツ人が考えている高齢化社会

会長 鈴木克彬

現在日本は、医療進歩のお蔭もあり、高齢者の平均寿命がどんどん伸び、遂に女性の平均寿命は、87歳超となりました。その為、90歳、100歳の方々が珍しくない時代になりつつあります。

一方、若者は減少、日本国全体の人口は下り坂です。この状況では、日本の介護保険制度、社会保障体制は、お先真っ暗です。そこで、このような日本に対し“ドイツの現状はどうだろうか”、関心を持った私は、過去何回かのドイツ訪問時、大変お世話になったベルリン独日協会理事のDr. Terue Mizonobe Schulzeさんにドイツの現状をうかがってみました。今回はその概要です。

ドイツ人の平均寿命

男性78歳、女性83歳とドイツはヨーロッパで一番の長寿命国家だそうです。そして2040年には65歳以上が32%、一方20歳以下は16%と更に少子高齢化が進むと予測されています。この傾向は日本とほぼ同じです。

ドイツ人が考えている少子高齢化の要因

- 1 医療の進歩（乳児と母親の死亡減少と医療の進歩）
- 2 衛生スタンダードの向上
- 3 健康意識の向上（食事、スポーツ、精神的な活動等）
- 4 出産率の減少
 - (1) 家族計画、男女同権、避妊薬等知識の広範囲化
 - (2) 将来への恐怖感（失業や技術革新に対する恐れ）
 - (3) 託児所不足等、就業環境の劣化
 - (4) 教育力アップによる価値観の変化

ドイツが考えている対策

- 1 各種の補助施策による出産率のアップ
- 2 移民政策
- 3 技術革新による生産力のアップで、国、州の財政力強化
- 4 学校とマスコミによる家庭環境・家族意識の重要性の強調
- 5 各地州政府からの経済面での対策、援助

介護施策の不足

独立意識の強いドイツでは、今後益々高齢者への介護施設と介護要員が必要になるのではないか、と思われている。更に認知症患者も増加、この点については、「日本のシステムはどのように進んでいるか」と逆に質問されました。

移民受け入れについての私の所感

中近東等からの移民の人達は、今日現在、清掃・ゴミ処理作業等体力を使う仕事に従事し、既にドイツ国の構成員の一部となっています。今後ともドイツは人口を減らさないためにも、移民を受け入れ、国家の循環システムに取り入れ、バランスをとっていくのではないかと感じられました。

2. 講演会「難民問題とドイツの対応」 柚岡一明氏講演要旨

現在、ドイツと始めとしたEUで大きな問題となっている難民について、長年ドイツの第一線で活躍された柚岡一明先生に最新の状況も含めて解説をしていただく公開講演会をぐんま日独協会の主催で開催しましたので、事務局がまとめたその概要を掲載します。



難民受け入れの歴史

1953年には1,900人だった亡命・難民登録数が1960年代・70年代は労働力補給の形で数百万人の外国人労働者がドイツに流入した。90年以降は東西冷戦終了後の「ソ連領」から200万人の「ドイツ語を話せないドイツ系移民および数万人のユダヤ系難民を受け入れた。2015年以降はシリア難民が急増。ピークは1992年の44万人と2015年の48万人で、ドイツの人口に対して外国人とドイツ系移民の合計は2010年ですでに19.3%を占めていた。

急増するシリア難民

最近急増の難民は、シリア内戦の長期化とそのための周辺国難民キャンプの環境悪化が原因で、経済が好調で難民認定に好意的なドイツに殺到している。ドイツの基本法には「政治的迫害される者は庇護権を享有する」と明記されている。シリアでは人口2,240万人に対して国内避難民760万人、国外避難民408.9万人で実に半数超が避難民である。難民の避難経路は複数あるがシリアからドイツまでおよそ3,500kmの行程である。急増する難民受け入れのために、統一書式の難民身分証明書の発行が決定されたが、申請から承認まで2015年第3四半期で平均5.2か月かかっている。そのため手続きのスピードアップのために1,000人の担当者を新たに採用した。

難民登録・申請・決定の流れ

流れとしては①登録、庇護申請意志表明 ②「EASYシステム」による受入れ施設への割り当て ③受入施設にて登録 ④連邦移民・難民庁への申請書提出 ⑤審査決定となる。認定されると認定段階に応じて滞在が許可される。2015年では48万人の難民のうちシリア難民は34%を占めて最大である。シリアに続いてアルバニア（同11%）、コソボ、アフガニスタン、イラクなどが続いている。認定は非常に厳しく、申請者に対する認定者の割合は全体では29%と低いが、シリア難民は96%と高くなっている。また、他に比べて高学歴者の割合が比較的高くなっているのもシリア難民の特徴でもある。

ドイツの難民政策の変化とひずみ

亡命・難民の認定を受けると、滞在許可が発給され、原則としてドイツ人と同様に就労が可能になり、社会保障や職業訓練を受けることができる。一方、難民による事件の発生や難民対策予算の増大で国民の不満も出てきている。難民を受け入れるには、自立できる環境を用意する必要があり、中途半端な状態では事件を引き起こすことになる。難民受け入れに対する国民の合意形成が必要である。

以上

3. 独俳（ドイツ語で俳句） — 連載3 （深田 勝弥 記）

○音のリズムのこと

昔の人は書物を音読していたといわれる。今の人には黙読する。僕も黙読しかしない。その僕が詩のリズムについて書くのだから、随分おこがましいことではある。お許し願いたい。

さて、前号で日本の俳句の五・七・五のリズムをドイツ語にどのように表すかということをお願いして理屈っぽい、退屈なことを書いた。今回も厚顔を恥じず詩のリズムについて書かせてください。

外国にはアリストテレスの時代から詩学というものがあつたようで、今もドイツ詩学というものがある。その入門書の最初に語の強弱のリズムについて書いてある。二拍子なら強弱（または弱強）のくりかえしリズムのことである。ギリシャ語なら長短のくりかえしのリズムらしい。

さて、ゲーテ作詩の「野薔薇」をドイツ語と日本語で読んでみよう。

原詩はローマ字で書き、強音節には2重下線、弱音節には1重下線をつけた。訳詩は平仮名で書いた。ドイツ語の日本語読みは片仮名で書き、文字の大小で強弱を示した。

Sah ein Knab' ein Röslein stehen,

わ ら べ は み た り

ザ アイン クナー アインレーライン シュテン

Röslein auf der Heiden,

の な か の ば ら

レーラインア デア ハイデン

War so jung und morgenschön,

きよらにさける

ヴァ ソ ユンウン モゲン シェーン

liefer schnell, es nah zu sehen,

そのいろめでつ

リーエア シュネー エス ナーツゼーン

ウェルナーの曲

わーらべーは 見ーたりー 野ーなかーの薔ー薇ー
きーよらーに 咲ーけるー そーのいーろめーでつー

読んでみてのご感想はいかが。

「どうもよく分からない。」との御感想だろう。

これは当然のことで、ドイツ語と日本語とはリズムのとり方が違う。

ゲーテは音節の強弱でリズムをつくり、

シューベルトはこれに曲を乗せてリズムをつくり、

近藤朔風はシューベルトの曲に七音節のリズムをつくり、

ウェルナーは強弱の音節に長短の音節を乗せてリズムをつくり曲を作った。

それぞれが何と素晴らしいことだろう。

僕もこのリズムを独俳にも持ち込んでみたいが、僕にはその力がない。

一昨年の日独協会のクリスマス会でトニーさんが僕の句を読んで皆に紹介して下さったが、ぼくには聞きとることすらできない有様だった。

しかし外国人とて強弱と七・五調のリズムをとって俳句を作っている人が世界に多くいるのはうれしい。例えば芭蕉の次の俳句がその好例だろう。

古池や蛙飛こむ水のおと

Der alte Weiher !

古池や

Es stürzt ein Frosch sich hinein ——

一匹蛙が飛びこんだ

Nachhall des Wassers.

水の残響

出典 „Matsuo Basho Hundertund elf Haiku“

Übersetzt von Ralph-Rainer Wuthenow

Amman Verlag

これなどは五・七・五の音節と弱強のリズムが殆ど合致している。

最後に榛東悠々からの句もひとつ

鴨の群れ浮かべる川はおだやかに

僕の故郷にラムサール条約によって保護されている鴨の池がある。

晩秋の夕方近くのほとんど流れていないような川へ羽根を休めに集まって来る。

Abenddämmerung,

夕暮れに

Eine Schar von Enten schwimmt

鴨の群れが浮かんでいる

Auf dem milden Fluss.

穏やかな川の上で

実を言うとドイツ語の先生が少々直してくれて、中七のリズムが整った。

3. 若手会員の活動 ～

高崎経済大学留学生パブロさんと日本人学生交流会 (日向 泰史 記)

7月8日(金)に高崎経済大学 0号館にて“ルートヴィヒスハーフェン経済大学からのドイツ人交換留学生 パブロとドイツを学ぼう”と題して、高崎経済大学にて交流会を開催致しました。

本企画は、若手会員の活動において、群馬県内の学生にドイツ又は海外へ興味・関心を持ってもらいたいとの思いの中、昨年ぐんま日独協会のイベントにも参加して頂いた、高崎経済大学ドイツ人留学生パブロさんに相談を持ちかけたところから始まりました。

彼自身も大学内の日本人学生と交流が少ない事や大学でドイツ語の講義を受講している日本人学生が、学外でドイツ語やドイツ文化に触れる機会が少ない事を大変残念に思っており、この機会を利用して学生交流、そしてドイツを更に知ってもらう場を作れないか、という共通の思いから開催に至りました。

交流会の内容は、①パブロさんの出身地フランクフルトと周辺地域及び自身が通うルートヴィヒスハーフェン大学の紹介、②サイコロクジ引きを使った質問ゲーム、③ドイツと日本の違いを知ろう ④景品付のドイツクイズ大会 といったものです。

パブロさんによる出身地及び大学紹介では、とても上手な日本語と分かり易いプレゼンテーションにて、ドイツ経済の中心地でありながら自然も豊かで美しいフランクフルトの街の様子を紹介してくれました。また、彼の通っている大学紹介では、歴史ある荘厳な校舎とそれとは正反対の現代の綺麗な学生食堂などを見て、学生たちがこんなところで勉強出来ている事を羨ましがる一面もありました。



日本とドイツの違いの紹介においては、事前にパブロさんに日本に来て驚いた事を彼のコメントも加えながら紹介をしました。例えば、日本は何故信号機と一緒に横断歩道はあるのか？ 日本は水が無料で飲める！ ドイツのトイレは有料！など。また、ドイツ公共機関、トラム、バスなどの利便性について説明をし、週末に周辺の街から夜にパーティーに出かけても 24 時間利用できるのだからちゃんと家に帰れるのだと聞くと、またも学生達より羨ましいとの声が連発されました。

最後のクイズ大会においては、ドイツの地理、政治、文化、また昨今話題のEUに関する問題など多岐に渡っての出題に非常に多くの正解者が出て、学生の学識の高さに驚かされ、大盛況のうちに終了をしました。

最後にぐんま日独協会の紹介もさせて頂きましたが、交流会後に学生達と話をしていくと多くの学生がドイツに非常に高い関心を持っており、こういった学生達が今後ぐんま日独協会に参加してくれることを切に願っています。



今回開催をした高崎経済大学 0 号館ですが、大学正門の真向いにあった古民家を改装した建物で、学生の憩いの場でもあると共に、地域コミュニティーを活性化させる為に一役買っているとの事で今回の開催に持ってこいの場所でした。学生達からも再度交流会を実施してほしいとのコメントもあり、趣向を変えながら定期的な交流会開催が出来れば、と思っております。



また、高崎経済大学以外にもドイツと交流を持っている県内大学があるようで、さらに裾野を広げて、学生みなさんにドイツや海外に関心を持ってもらえるような活動を広げていきたいと思えます。

最後に、今回の交流会の準備にご協力頂いた高崎経済大学の関係者の皆様、日本語試験の忙しい中協力を頂いたパブロさんにこの場を借りて御礼を申し上げます。

(事務局註：本交流会は高崎経済大学の後援とドイツ連邦共和国大使館のご協力をいただいで実施することができました。)

4. 講演会「温泉と健康」 白倉卓夫氏講演要旨

温泉は昔から健康増進や病気治療に利用されてきました。温泉で疲れをとる（休養）、温泉宿に逗留して元気を取り戻し（保養）、暫く温泉病院に入院して治療を受ける（療養）とその利用法はさまざまですが、わが国では温泉に行く人の多くは気ままに楽しんでくる享楽旅行が通例です。ドイツにもたくさんの温泉保養地がありますが、公的な医学的、社会的な基盤に支えられた保養地での休養・保養・療養形態はハード、ソフトいずれの面でもわが国とは全く異なっています。

保養地には入浴を楽しめる中心施設（テルメ）以外にも飲泉場、娯楽施設（クアハウス）、散歩や運動のための自然空間（クアパーク）、温泉治療施設（クアミッテルハウス）、周辺には温泉病院や宿泊施設があって、保養地訪問客（全独保養地訪問客年間合計2千2百万人、2012年）を迎え入れています。これらの保養地には温泉浴・飲泉を主とする以外にも気候、拘泥、クナイプ、地形、海洋、洞窟など各種自然療法を取り入れた保養地が少なくありません。

またこれら訪問客のうち十分の一は健康保険、年金保険利用者とされていますから、保険適応のないわが国とは大違いです。ただ保険が適応されるには温泉医の診察と処方箋が必要で、専門の審査会の認可をえて初めて通院・入院に対する健康保険、年金保険からの給付が受けられます。ただ最近では財政事情から適応条件が厳しくなってきていると聞きます。

今日の近代薬物治療の普及下にあってもなお温泉の休養・保養効果は健康増進、疾病予防に有用であり、療養効果は一定期間の治療薬の代わり（代替）として、あるいは治療薬の効き具合を更に補う（補完）療法として適切に活用されるべきと思われます。

（事務局註:これは8月20日にベルツ博士勉強会の一環として開催した白倉卓夫先生の講演要旨です。講演では60ページにおよぶパワーポイントにて詳細なプレゼンテーションが行われました。白倉先生は群馬大学名誉教授でぐんま日独協会理事とNPO健康と温泉フォーラム名誉会長などを務めています。）

・ 講演会の様子 -



【講演中の白倉先生】



【パワーポイントで温泉の構造の説明】



【講演終了後の質疑・自由討議】

5. デザイナー修行奮闘記 - 連載 8 (井上 晃良 記) 私の「鉄道デザイナー」への道 III

語学学校のカリキュラムと東独旅行

ドイツ語学校のゲーティンスティチュート（以下ゲーテと記す）の集中コースは、様々な国から様々な目的を持って同じ学校で机を並べるのであるが、学校も2ヶ月のコースで様々なプログラムを用意していた。ブレーメンの市街地の見どころを見て廻るのはもちろん、ブレーメン州のもう1つの街であるブレーマーハーフェンへの日帰り旅行や、ハンブルク、リューベックなどへの観光、また2泊3日の西ベルリン旅行などがそうである。

特に西ベルリンへの旅行は、とても刺激的であった。それは、まだ東西ドイツが分断されていた1980年代であるからだ。陸の孤島と呼ばれた場所への興味もさることながら、まだ体験した事のない社会主義の現実を見る機会でもある。西ベルリンへは、バスで行くのだが、西側の自動車を通る事の出来るトランジット道路が幾つかある。国境では、パスポートチェックを始めバスの隅々まで調べられる。私はこのコースに1年間、つまり6コース通ったが、その中で1回だけ台湾人のクラスメイトが国境で足止めを食らってしまった。台湾は、当時東ドイツとの国交がなかったため、トランジット目的の東独通過すらできない現実を目の当たりにしたのである。

私が東ドイツと社会主義について、その現実を体感できたのは、今思えば非常に良い経験であったと思う。と、言うのもルームメイトの大学生と2人で、ドレスデンに行こうと計画を立てたのである。交通手段は鉄道である。ブレーメンから直接ドレスデンへ行く事は難しかったので、作戦を考えた。まず、ブレーメンから鉄道で西ベルリンに入る。国境検問所で東ベルリン観光の1日ビザを貰って東ベルリン入りし、アレキサンダープラッツにある、国营旅行社の事務所へ出向いてドレスデンへの旅行申請をすると、ビザを発行してくれると言う。今では考えられないが、当時は綱渡りのような手段で東独旅行を叶えたのである。

西ベルリンへの旅行は簡単である。ブレーメンからハノーファーで西ベルリンへ行くトランジット列車(D-Zug)に乗換える。ベルリン迄の東ドイツ国内は電化されていないのでディーゼル機関車の牽引する客車である。国境駅のヘルムシュタット駅を過ぎ、少し進んだ東西ドイツの国境を越えたマリエ

ンボルンに留置線があり、そこに列車は停車する。すると東ドイツの国境警備員がシェパードを連れて車内外の検査を徹底的に行うのである。この時の緊張感は今では簡単に味わえないし、出来れば早く終わって欲しいと祈るような気持ちになるだけである。

検査が終わると列車はゆっくりと走り出し、西ベルリンへと向かう。西ベルリンとは言え、幹線鉄道は東独国鉄の管理である。終点は東ベルリン内の駅であるので、うっかり寝過ごしたりすると大変である。西ベルリン内の停車駅はツォー駅である。ここでほとんどの乗客は降りる。クラスメイトとは、ここで一泊し、翌朝いよいよ東ベルリン経由でドレスデンへと向かう。

手元にあるガイドブック 1 冊のみが頼りで、それに従って 2 人で行動する。つまり、まずアレキサンダープラッツは、S バーンと呼ばれる通勤電車を使って行くので、そこに行くためには、昨日降りたツォー駅から S バーンで終点のフリードリッヒシュトラッセへ行く。ここが東ベルリンへの国境駅で駅の外は東側である。プラットホームから地下へ降りるとコンコースが国境検問所で、ここで入国審査を受けるのである。検問所での検査は、トランジット目的のマリエンボルンでの検査より更に厳しい。パスポートチェックは言うに及ばず、私のリュックサックのポケットは全て開けられ、中に入っていた独和辞典をめくるほどの厳しさである。西ベルリンに滞在しているだけで若干の緊張があるのだが、この時は今までに味わったことのない緊張感に襲われた。所定の手続きとして西ドイツのマルクの一定金額を 1 対 1 のレートで東ドイツマルクに交換させられ、ようやく東ベルリンへと入る。入国審査場から階段を上ると、東独側の S バーンの駅のホームである。

(本記事はイカロス出版株式会社発行『鉄道デザイン EX 03』に連載されたものを転載したものです。同社のご好意により転載の許可をいただいています。)

6. 総会と内部講演会（前橋市のLRT導入関連）（事務局 記）

4月29日に定期総会を開催しました。県からは山田浩樹企画部戦略課長が参加され、ご挨拶をいただきました。提案された全議案は原案どおり承認されました。来年は「ドイツフェスティバル in ぐんま」開催の年であり、パネル展示はベルツ博士に関連した内容で進めることも確認されました。



総会后、前橋市で導入が計画されているLRTについて、LRT先進国であるドイツやその他の欧州各国の状況の説明と前橋市での導入計画についての講演会が行われました。井上晃良 事務局次長はドイツで電車のデザインの仕事をしていたその道の専門家でもあることから、前橋市のLRT導入の相談にもなっています。



LRTの可能性は、単に道を路面電車が走るといった単純な意味ではなく、従来の鉄道とも乗り入れが可能で都市構造そのものと直結した戦略的なものとしてドイツを中心とした欧州では積極的な導入が図られている現状も紹介されました。



その後引き続いて行われた懇親会の場でもLRT問題を中心に活発な質疑応答が継続しました。毎月開催される定期的なドイツサロンなどになかなか参加できない会員も顔をそろえて交流を深めることができました。

